

特集

三軒茶屋を拠点とする大学と地域との関わり

鶴田 佳子

TSURUTA, Yoshiko

(昭和女子大学人間社会学部准教授)

1. はじめに

三軒茶屋には、東急田園都市線と世田谷線の駅があり、渋谷から二子玉川方面へと延びる玉川通り（国道246号線）を軸として三軒茶屋交差点を起点に世田谷通りが西へ、茶沢通りが北へと分岐するように位置する。3つの大通りには、多くのバス路線が通り、電車とともに交通の要となり、駅周辺を中心に延びる複数の商店街、パブリックシアターをはじめとする文化施設をもつキャロットタワー、世田谷区民会館別館や太子堂出張所など多様な施設が揃っている。三軒茶屋の住民だけでなく、区内外からも利用されるまちである。玉川通り沿いに位置する昭和女子大学にはコンサートホールとして活用される人見記念講堂があり、学生たちの学びの場としてだけでなく、文化施設として三軒茶屋のまちに人を呼ぶ一翼をも担う。関東大震災以降、都市化が進み発展してきた商店街や路地の多い住宅街、駅周辺の再開発によって整備されたエリアなど三軒茶屋は多様な特性をもち、日々変化するまちの様相はリサーチする度に発見がある。

筆者は、昭和女子大学の全学部生を対象とする一般教養科目の中で「都市論」を十数年担当している。建築やデザインを専門とする学生もいるが、文学や歴史学、心理学を専門とする学生も履修する。どのような分野で学ぼうとも社会に出て、多くは都市で生活をするであろう。生活の場としての都市に少しでも関心をもってもらいたいと講義しており、まず大学周辺のまちのリサーチからスタートさせている。まちを歩き、観察し、自分なりの視点で特性を捉え、他の学生へ伝えるという課題であり、学生と地域との関わりの第一ステップである。さらに地域との関わりをもつための第二ステップでは、対象学生を絞り、チームでテーマを共有し、リサーチに基づいて地域へ提案をする。第三ステップでは、地域と共に行動を起こす。筆者の専門は建築計画・都市計画であるが、所属する人間社会学部現代教養学科の学生は、社会科学分野を幅広く学んでいるため、都市社会学の視点から「地域社会のデザイン」や「現代都市論」といった科目を担当している。研究室では、都市空間と人の活動との関わりを研究テーマに掲げ、所属する学生たちは地域連携の活動を通して都市や社会をみる目を養っている。地域の方々と共にイベントを企画、運営し、まちに活気や魅力を生み出したいと活動している。

2. 研究室での取り組み

魅力あるまちにするために、まずまちを知り、魅力を発見、あるいは創出する必要がある。学

生と地域をつなぐ第一ステップとして、まちを観察することから始めているが、学生だけでなく、住民や住民以外のまちの利用者にもまちに関心をもってもらうことが地域を活性化することにつながるものと考え。学生たちが人とまちをつなぐ、あるいは魅力を発見、創出する一助となるためにできることを考え、まちに出かけ、地域の方と接し、活動している。まちでの活動では多くの人が関わり、賑わいを生む手段としてイベントを活用している。イベントは一時的な賑わいではあるが、人と人、あるいは人と地域をつなぐきっかけとなる。研究室の活動として、世田谷区内では三軒茶屋を中心に4つのイベントと2つの施設に関わってきた。名称と時期を以下に示す。

- ① イベント「したのやえんにち」：2007年から毎年11月23日に開催。2013年に第7回を実施。
- ② イベント「世田谷パン祭り」：2011年から毎年秋に開催。2013年に第3回を実施。
- ③ イベント「三軒茶屋まち道楽」：2012年春から季節ごとに開催。2013年夏、秋の回に参加。
- ④ 「世田谷芸術百華2012」のプログラムのひとつ「せたがや芸術散歩」：2012年11月17日実施。
- ⑤ 世田谷美術館付属カフェの「ピクニック・ランチボックス」：2012年春から期間限定販売。
- ⑥ 世田谷公園売店の改善提案：2011年冬からリサーチ開始。2012年夏にかき氷販売開始。

事例①②③は、商店街主催、事例④は世田谷区主催のイベントである。事例⑤は世田谷美術館のカフェとコラボレーションし、テイクアウトメニューを提案、事例⑥は公園の売店をもっと利用してもらおうと売店の改善案を売店を運営する世田谷サービスに提案したプロジェクトである。以下、事例ごとに活動内容や経緯について具体的に紹介をする。

3. 商店街との取り組み

(1) イベント「したのやえんにち」

「したのやえんにち」は、下の谷商店会、下の谷町会とともに7年間実施してきたイベントである。規模は小さいものの、地域のコミュニティの大切さを実感できる場である。

① 開催までの経緯

三軒茶屋には多くの商店街があるが、中でも下町情緒溢れる商店街として、かつてNHKの番組にも取り上げられた商店街が下の谷商店会である。三軒茶屋の駅から茶沢通りを下北沢方面に進み、一つ目の信号を右折、さらに太子堂中央商店街を三宿方面に進むと左手に下の谷商店会の入り口、銭湯と青果店がある。駅からは離れているが、関東大震災後にできた歴史ある商店街である。(図1参照)



図1. 下の谷の位置図

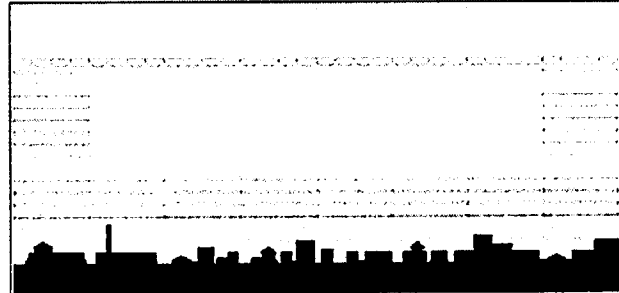


図2. 「わたしショップ」の布地「下の谷」デザイン

商店街ができる以前の下の谷は、商店街の北側を東西に流れる烏山用水（現在の烏山川緑道）を利用する下の谷耕地であった。下の谷を、周辺にスーパーマーケットができ、顧客を奪われたことや商店主の高齢化等の問題から店舗数が減少し、シャッターの下りた空き店舗が増え、店舗から住宅へ建て替えるケースもみられる。

そこで、2007年の春、閉まったシャッターの前のスペースを活用して仮設の店を開く「わたしショップ」の提案が商店会の集まりでなされた。下の谷商店会に店を開いて数年の若い会員からの斬新な提案である。折りたたみ式屋台である「わたしショップ」をシャッターの下りた店舗の前に並べ、フリーマーケットを開催するという企画であり、商店会の承認を得た。2007年6月に放映されたNHK「新日本紀行ふたたび」の中で下の谷商店会がふたたび取り上げられ、以前のような賑わいはないものの人情のあるまちであり、新たな交流も始まっているとして、若い会員の活動にスポットを当てた。この番組によって、地域の方々へイベントの情報が伝わり、イベント開催に向けてスタートした。番組が制作されている頃、研究室では学生たちと三軒茶屋らしさを探るために下の谷界限に着目、商店会長を訪問し、「わたしショップ」の活動を紹介される。その後、発案者と話し合い、「わたしショップ」を使ったイベントの実施に向けて、商店会、町会をはじめとする地域の方々との準備に学生たちも加わることとなる。活動に取り組む学生は現代教養学科の学生だけでなく、建築を専攻する学部生と大学院生の協力も得て、まちの取材の他、ポスターや屋台作りに至るまで本格的に準備を開始する運びとなった。

② 活動内容

第1回のイベント「したのやえんにち」は、下の谷商店会恒例もちつき大会にあわせて、2007年11月23日に開催された。商店は通常、日曜は店を閉じているが、祝日は開けている点と、もちつき大会は地域の子供たちにも人気の行事であり、多くの人の参加を期待できる点から開催日が決まり、折りたたみ式の屋台「わたしショップ」を並べた形態と子供向けのゲームなどを企画したことから、縁日のような賑わいをイメージし、名称を「したのやえんにち」とした。

7月にメンバーを募集し、9月から具体的なイベント内容や準備作業の打ち合わせを行い、10月から本格的に取材や屋台作りを開始した。折りたたみ式の屋台「わたしショップ」は、43というデザイン事務所の建築家が設計し、取り外し可能な布地部分は建築を学ぶ学生と建築家が協働で仕上げた下の谷オリジナルデザイン（図2参照）である。骨組みの組み立て、塗装、布地の裁断から彩色まで、手作業で10基の制作に取り組んだ。10基の屋台は、営業している常設の店舗とともにイベント当日はフリーマーケットの店舗として、賑やかな商店街の雰囲気を醸し出すとともに、人と人とのつながりや下の谷という地域とのつながりを生み出す装置として活用される。フリーマーケットの店主には、商店会がかつて店開きをしていた元店主や地域の住民、学生がなる。学生は商品の販売だけでなく、インフォメーションブースも兼ね、商店街入り口で店開きをする。

イベント告知のためのポスター（図3参照）と当日配布用のインフォメーションマップを建築専攻の学生たちが担当し、屋台の布地デザインとリンクする形で仕上げていった。現代教養学科の学生たちは、屋台作りの傍ら、地域の方々に下の谷の歴史と魅力をインタビューし、当日、多くの方へ伝えるために取材内容をパネルにまとめた。商店会の居酒屋「かめや」の協力を得て、イベント開催時の昼間の時間帯（居酒屋としての営業時間前）に店を借り、一日だけの駄菓子屋「かめや」を開店し、店内では子供向けゲームとパネル展示を行うことができた。パネルは、このイベントで初めて下の谷に来る人に下の谷の魅力を伝えることを主眼に、下の谷周辺の変遷も含め、インタビューに協力頂いた商店会や町会など地域の方々の声をまとめた。当日は、もちつき大会、「わたしショップ」を使ったフリーマーケット、駄菓子屋「かめや」の他、来場者参加型の「お使いカフェ」も一日だけ特別営業し、地域の方々の協力のおかげで賑わいのあるイベントとなった。

2年目以降も毎年11月23日のもちつき大会にあわせてイベント「したのやえんにち」を継続して開催している。（写真1、2参照）2007年に制作した10基の屋台を修理しながら活用してきたが、7回目を迎えた2013年には骨組みの破損がひどいものは処分し、フリーマーケットの規模を縮小しながら継続している。また、1年目に取材した下の谷の歴史と魅力については、2009年3月に小冊子「したのやえんにち」（図4参照）としてまとめた。この中には、商店会の蕎麦屋の店主から預かった貴重な過去の写真や昭和の店の変遷を聞き取って制作したマップ（図5参照）を掲載することができた。

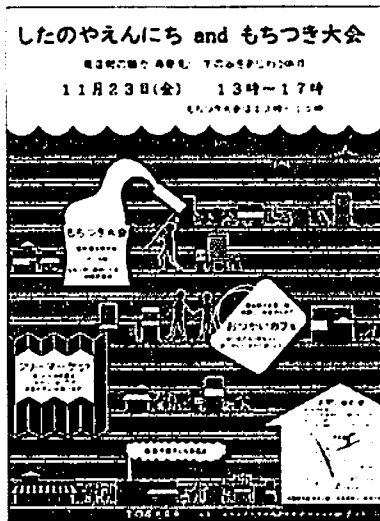


図3. 第1回「したのやえんにち」ポスター



図4. 小冊子「したのやえんにち」の表紙



写真1. 「したのやえんにち」商店会
入り口付近の様子



写真2. 折りたたみ式屋台「わたしショップ」
を使ったブース。学生が子供向けゲームを担当。

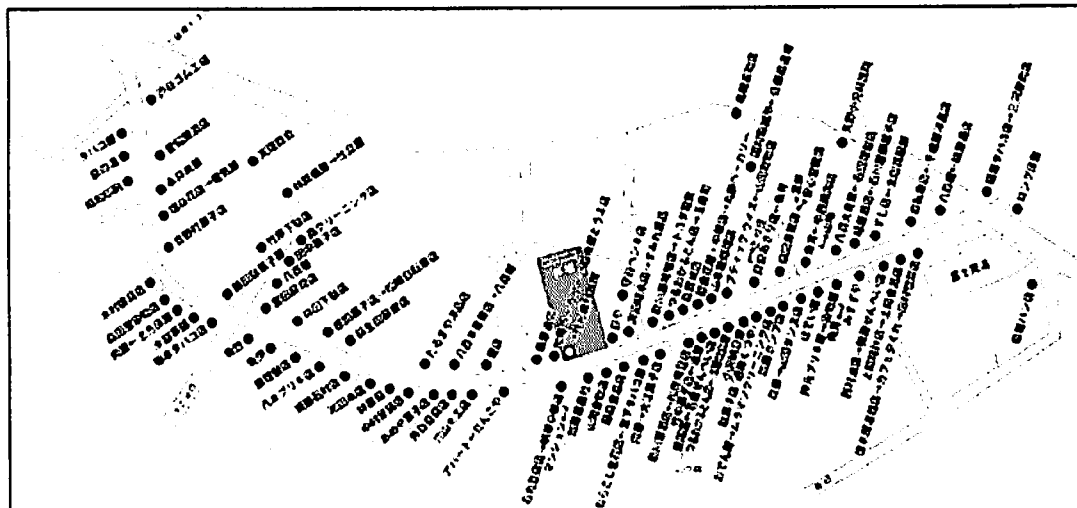


図5. 小冊子「したのやえんにち」に昭和の店の変遷を記録した商店会マップ

(2) イベント「世田谷パン祭り」

「世田谷パン祭り」は第1回目の開催当時、設立3年目の三宿四二〇商店会が主催し、開催2回目にして1万人を超える規模となったイベントである。歴史ある下の谷商店会とは対照的な商店街であり、場所だけでなく、イベントの規模も対照的である。周辺地域の住民だけでなく、区内外からパン好きが集まる。このイベントを通してイベントの企画、広報、運営について学ぶと同時に世田谷公園という公共の場の活用についても考える機会となっている。

① 三宿四二〇商店会との関わり

三宿四二〇商店会は、三軒茶屋と池尻大橋の間にある都道420号線（三宿通り）周辺の商店などの事業者によって2009年10月に発足した新しい商店街である。昭和女子大学からは徒歩5分程度の距離であるが、いずれの駅からも遠く、公共の交通手段としてはバスの利用が便利な立地である。三宿通り沿いに区立世田谷公園、近隣にIID世田谷ものづくり学校、健康増進・交流施設せたがやがやがや館といった施設がある。2011年春に商店会会長から、設立3年目の新しい商店街であり、周辺地域への認知度が低いため、地域の方々に知ってもらう様々な取り組みをしていること、商店街の宣伝だけでなく、地域の賑わいを創出し、地域へ還元する活動を行うことで地域に根付いた商店街を目指すという目標を掲げていることを伺い、近隣にある大学として何か連携ができないかと「三宿四二〇商店会活性化プロジェクト」をスタートさせた。

まず、研究室の学生たちとまちの観察から始め、三宿エリアの魅力と問題点を洗い出し、報告をすると共にすぐに実現可能ないくつかの企画を商店会の役員の方々に提案をした。アイデアはすでに商店会でも考えているものもあったが、その中から「三宿名物をつくる」という案が採用された。折しも、商店会では「世田谷パン祭り」の10月開催に向けて準備が進んでいる時期であり、このイベントで商品を販売することを目標に商店会の2つのパン屋とコラボレーションすることとなった。この時点で現代教養学科の生活経営学を専攻する研究室もメンバーに加わり、2つの研究室の学生たちがパン屋のシェフと話し合いを進め、三宿の「三」にかけた三色パンをつくり、世田谷パン祭りで販売をする運びとなった。

三色パンの考案以外に、商店会が進めている他地域との連携プロジェクトにも参加し、8月には連携先の新潟県長岡市栃尾地区へ足を運び、酒米や野菜の生産現場を見学し、レポートにまとめた。11月に商店会主催のイベント「三宿市場」の中で栃尾の野菜や日本酒が販売され、学生の現地レポートを添えられて栃尾の魅力を伝えつつ、販売のサポートも行った。

② 「世田谷パン祭り」の概要

第1回の「世田谷パン祭り」は2011年10月10日、三宿四二〇商店会とIID世田谷ものづくり学校、池尻小学校第2体育館を会場に開催された。「パンを楽しむお祭り」として、世田谷区内の有名パン屋を中心に都内をはじめ、日本各地の人気パン屋が集結し、美味しいパンやパンのお供になるドリンク・食品の販売、シェフによるトークショーやワークショップなどパンという

食文化を楽しむ内容であった。第2回は2012年11月23日に開催され、第1回の三宿四二〇商店会、IID 世田谷ものづくり学校、池尻小学校第2体育館に加え、三宿通りに接する世田谷公園も会場となった。第3回は2013年10月14日の祝日に開催され、会場は第2回よりも広がり、三宿四二〇商店会、IID 世田谷ものづくり学校、池尻小学校第2体育館、世田谷公園、せたがやがやがや館となり、年々、来場者数も増え、第2回に1万人を超え、第3回には1万7千人以上もの来場者を数えた。

第1回、2回ともに主催は三宿四二〇商店会である。3年目を迎えた2013年は規模の拡大とより地域との関わりを重要視したイベントとして、世田谷パン祭り実行委員会が組織され、商店会だけでなく、周辺の施設として、会場を提供しているIID 世田谷ものづくり学校、池尻小学校をはじめ、第1回から協力している昭和女子大学と食糧学院もメンバーに加わり、準備を進めた。昭和女子大学と書いたが実質は3年間、研究室として協力体制をとっている。

③ 「世田谷パン祭り」での役割

3回の開催を通じて、商店会にある2つのパン屋「シニフィアン・シニフィエ」、「ブーランジェリー ラ・テール」と3度コラボレーションし、毎年異なる三宿名物三色パンを開発してきた。担当する学生が毎年異なり、研究室内で先輩から後輩へ引継ぎをした上で、その年のメンバーが改めて三宿らしさを考え、提案する。三色の中身や形、味、コンセプトを考え、シェフに提案し、プロの意見を伺い、話し合う。最終的に商品となる段階で料金と商品名を決定する。販売用のPOP（図6参照）や商品解説のチラシも作成し、当日は朝の会場設営に始まり、搬入、販売の手伝い（写真3参照）を行う。

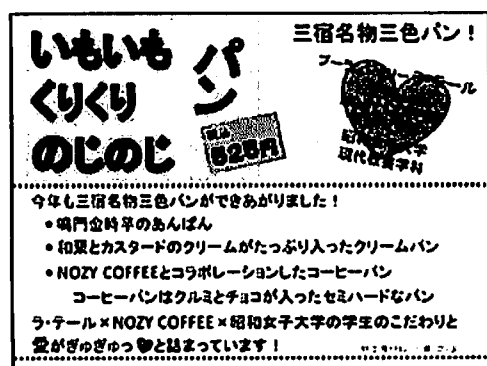


図6. 第2回「世田谷パン祭り」で使用したPOP



写真3. 第1回「世田谷パン祭り」での販売準備風景

三宿四二〇商店会は個性ある店舗が多く、通常の商店街のように店舗が連続して通りに面しているわけではない。店舗と店舗の間にマンションやオフィスビルをはさみながら、点在している形態である。商店会として線のつながりを持ち、さらに地域と関わることで面としての広がりをもつことが望まれている。名物としてどのように三色パンに三宿の特徴を出したらよいか、コラ

ボレーションするパン屋のパンだけでなく、他のパン屋でもリサーチを重ね、話し合い、シェフによっていくつかのアイデアを実現してもらった。

例えば、1年目は三宿の魅力の一つである世田谷公園へ購入したパンを片手に出かけてもらい、公園を楽しんでほしいという思いを込めて「わくわくさんぽプチセット」を考案、販売した。2年目には、商店会内の他店舗とコラボレーションすることで、それぞれの店舗しか知らなかった顧客へ新たな情報を提供できるのではないかと考え、NOZY COFFEE のコーヒー豆を使用したパン「いもいもくりくりのじのじパン」を考案した。コーヒーを練りこむにあたり、香りや色をどう活かすか、素人の学生には思いもよらない工夫が凝らされ、パンとコーヒーの専門家の白熱した議論の結果、イメージするこだわりのコーヒーパンへと仕上がった。

3回目の2013年はパン屋とのコラボレーションのほか、事前準備の段階からイベント全体の企画・運営に学生も携わり、イベント当日は会場受付を担当した。1万人を超える規模のイベントで準備から当日の警備、片付けまでボランティアスタッフの力は大きい。企画から携わっている学生は、大勢のボランティアスタッフをいかに動かすか、組織のあり方を学ぶ場となった。研究室は第2回まで、商店会の名物の考案と当日の販売のサポートという部分的な関わり方をしてきたが、第3回は実行委員会という全体の運営にも関わることで、イベントの内容だけでなく、地域全体について考える機会となった。

(3) イベント「三軒茶屋まち道楽」

「三軒茶屋まち道楽」は、太子堂商店街振興組合が主催し、歩行者天国となる茶沢通りと烏山川緑道を会場とするイベントである。「住んでいる街で、もっと遊ぼう。」をテーマに、フリーマーケットや産直市場「世田谷マルシェ」、地域のサークルや同好会が集まる「まちなかの新歓@太子堂」など「三軒茶屋まち道楽」実行委員会が企画・運営をしている。イベントを通じて、友人ができ、日常の暮らしの中にも絆が生まれる様々な仕掛けがある。2011年秋から、まちなかでの活動が始まり、2012年4月29日に第1回のイベント「三軒茶屋まち道楽」が開催された。その後、ツアーやサロン、ワークショップなど多様な活動が行われる中、「三軒茶屋まち道楽」は定期的に季節を通してまちを楽しむイベントとして開催されている。

研究室では、2013年夏の「ほろ酔い道楽」(第6回「三軒茶屋まち道楽」写真4参照)と秋の「ドレミファ♯道楽」(第7回「三軒茶屋まち道楽」写真5参照)に参加し、実行委員会とともに会場設営から片付けまで行い、イベント内では、スタンプラリーや太子堂オリジナル・ポップコーンの販売などを担当した。商店街という器を借りつつも商店街の枠を超え、三軒茶屋のまちと人との関わりが深まる仕組みは、前述の2つのイベントとは異なる。イベントをきっかけに日常の交流へとつながる工夫がある点、季節にあわせて新たな試みがなされている点が特徴である。



写真4. 第6回「三軒茶屋まち道楽」

鳥山川緑道でのフリーマーケット



写真5. 第7回「三軒茶屋まち道楽」

茶沢通りと緑道入り口付近

3. 世田谷区主催のイベント「世田谷芸術散歩」

事例④は、世田谷区の「世田谷芸術百華 2012」のプログラムのひとつとして、世田谷区主催、昭和女子大学と株式会社世田谷サービス公社が協力する形で企画から運営まで携わったイベント「せたがや芸術散歩」である。世田谷区には大学と短期大学を含めて10校以上が存在し、インターシップや学習講座等で区と連携して取り組んでいる。今回は、文化・芸術の分野でも連携した取り組みを推進し、大学生世代に区の文化や芸術、歴史により親しんでもらいたいという区からの提案により、世田谷区、せたがや文化財団、世田谷サービス公社とともにスタートさせた。本研究室と現代教養学科の「メディア表象論」を学ぶ研究室の学生で担当し、最終的に「せたがや芸術散歩」3コースを企画、実施した。

「せたがや芸術散歩」とは、世田谷の魅力を見つめ直すために世田谷区内にある文化・芸術に関する施設や人物、自然などを歩きながら体感してもらうイベントである。コース1は「小さい秋をみつけて楽しむ旅 ～散歩ワークショップ～」、コース2は「映像の進化を見る！ ～過去から未来へ～」、コース3は「文学者が築いた“社会”との絆を探る ～“アナログ”と“デジタル”の魅力～」とし、コース1と2は2012年11月17日に、コース3は11月24日に開催された。

本研究室で担当したコース1「小さい秋をみつけて楽しむ旅 ～散歩ワークショップ～」は、世田谷区の自然が感じられる場所をめぐり、小さい秋をみつけて味わうコースである。二子玉川駅から出発し、国分寺崖線や東急玉川線跡、旧別荘地といった史跡からまちの変遷を学ぶとともに、玉川・岡本・瀬田エリアの紅葉を楽しむ。道中、落ち葉を拾いながら、ゴールである砧公園の世田谷美術館まで散策するルートとした。ゴールの世田谷美術館では、美術館のカフェと現代教養学科の学生がテイクアウトメニューとして考案した「ピクニック・ランチボックス」を食べ、交流する。味覚を通して秋を楽しんだ後、拾った落ち葉を使ってカードを作成するワークショッ

プを行い、自ら手を動かし、芸術の秋を体験する内容である。二子玉川駅から美術館までのまちあるきルートや美術館でのワークショップは、美術館のプロの力を借り、実現することができた。可能な限り学生主体で運営できるように、暑い夏の最中、何度も現場を歩き、観察し、歩く道や説明箇所、休憩場所の選定を行い、当日、時間や環境の制約から伝えきれない説明や参加者にイベント後に振り返ってもらうことを考慮して小冊子を用意した。カード作成のワークショップの準備として、何度か練習し、どのような葉が適しているか、どの程度材料を用意すべきか、作成中の注意点は何か等、確認をし、参加者に楽しんでもらうことを第一に問題点を検討した。(写真6参照) イベント当日は、歩行中の安全に気を配るとともに参加者と交流をはかることも目的に学生たちは参加者の間に入り、案内した。当日は雨模様であったが、落ち葉も程よく拾うことができ、多くの方々の協力により、無事にイベントを終えた。(写真7参照) テーマをもってまちの魅力伝える試みとして、冊子での一方的な情報提供だけでなく、参加者が体でまちを感じることで魅力が増し、交流しながら体験することで思い出として記憶に残るという2つの効果があったと考えている。



写真6. 「せたがや芸術散歩」
落ち葉でカード作成。練習風景。



写真7. 「せたがや芸術散歩」当日。
岡本民家園にて落ち葉を拾いながら見学

4. 施設への提案

(1) 世田谷美術館のカフェへの提案

2012年に世田谷美術館の改修工事があり、2012年3月31日のリオープンにあたり、美術館地下にカフェが開設されることとなった。運営事業者となった世田谷サービス公社からの依頼でカフェへ提案をすることとなり、本研究室と世田谷パン祭りでも一緒に取り組んでいる生活経営学専攻の研究室とでプロジェクトチームを組み、2011年10月から準備を開始した。提案したアイデアは、砧公園のロケーションを活かし、公園の自然の中でピクニックを楽しんでもらうテイクアウトメニュー「ピクニック・ランチボックス」である。

美術館には入らず、公園のみの利用者にもランチボックスを通して、美術館を知ってもらうこ

とも考慮し、まず、公園の利用状況の観察からスタートした。ランチボックスとしての価格やパッケージなど、既存の商品もリサーチしながら、ミーティングを重ねた。リサーチや提案をするにあたり、メニュー班、パッケージ班、広報班の3チームに分かれて作業を進め、具体的なアイデアを詰めていった。カフェ店内では、フランスのブルターニュ地方の名物料理「ガレット」などを楽しむことができるため、メニューにはブルターニュ地方の名物を入れ、子供やお年寄りにも食べやすいものを提案した。パッケージについては、公園での運びやすさと環境への配慮を意識した提案となった。広報としては、ブログ、チラシの作成、ランチボックスの解説を入れたボックスにかける帯の作成を行った。提案内容を世田谷サービス公社の担当者やカフェのシェフと話し合い、メニューについては試作をしてもらい、調整しながらオープンに向けて準備を進めた。2012年3月31日世田谷美術館リオープン時に完成した春メニューのランチボックスを店頭販売しつつ、カフェオープンの宣伝も行った。(写真8参照) 季節限定の商品とし、5月初めまで春メニュー、10月から秋メニューを販売した。2013年も継続して春と秋に売り出されている。本研究室は立ち上げの2012年5月までの関わりとし、秋メニュー以降、生活経営学専攻の学生たちが継続して行っている。

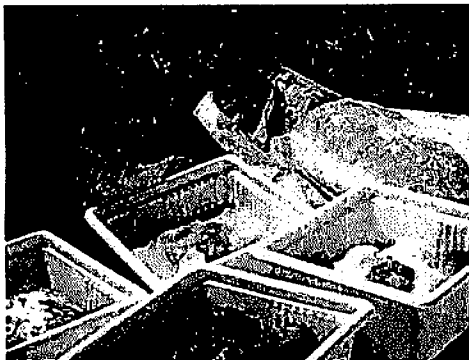


写真8. 世田谷美術館のカフェのピクニック・ランチボックス第1弾。2012年春。

(2) 世田谷公園売店改善プロジェクト

事例⑥は区立世田谷公園の噴水広場に面する売店をもっと知ってもらい、利用してもらおうという改善プロジェクトである。担当する授業「地域社会のデザイン」の課題として、世田谷公園をリサーチする中で売店をもっと地域のために活かせないかと考え、2011年に運営事業者である世田谷サービス公社へ提案をするところからスタートした。2012年4月に売店プロジェクトを立ち上げ、研究室の学生を中心に有志メンバーが集まり、改めて、公園と売店のリサーチを行い、利用者や地域の特性を考え、幾つかの提案を行った。プロジェクトを立ち上げるにあたり、大学だけでなく公園周辺の団体等とも協働で進めたいと考え、隣接する三宿四二〇商店会とIID世田谷ものづくり学校にも加わってもらい、学生の提案に対し、プロの立場から意見をもらい進めて

いった。2012年夏には、提案の第1弾として、売店を取り囲んでいた自動販売機を一部移動させ、売店の窓口を増やし、店員とのコミュニケーションがとりやすいように改善をした。その窓口で屋外プールを利用する子供をターゲットにしたソフトクリームとかき氷の販売を提案し、ソフトクリームは公園オリジナル商品を考案し、宣伝用のポスターも作成した。(図7、8参照) かき氷は定番の味としたところ、親子連れの利用もあるものの公園に散歩で訪れるお年寄りの利用もあり、幅広い層に定着し、2013年も継続して販売した。2013年秋には、冬の商品を考案し、世田谷サービス公社側で検討している段階である。単に商品の提案だけでなく、サービスの提案も行っており、今後も継続して、地域の公園にある特性を活かした売店像を目標にアイデアの提供を行っていく。また、2013年4月に開館した健康増進・交流施設せたがやがやがや館の売店もあわせて、提案を試みる予定である。

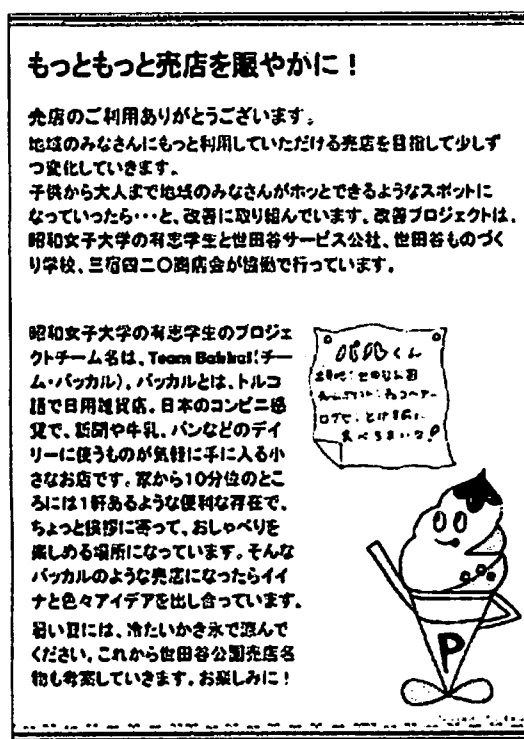


図7. 世田谷公園売店に当初設置したポスター

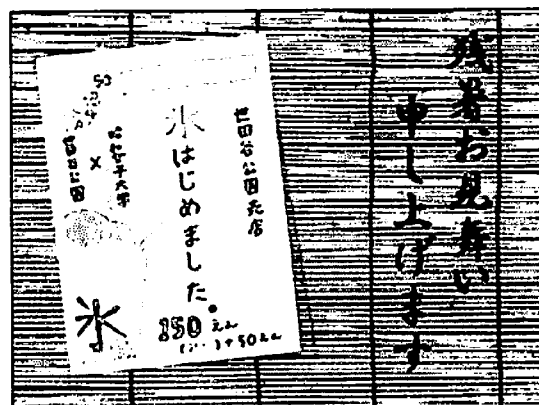


図8. 世田谷公園売店でかき氷を売り出した

2012年8月のポスター

5. 大学と地域社会との連携

大学のある三軒茶屋、三宿をはじめ、世田谷のまちへ飛び出し、地域と関わりながらイベントや提案を行ってきた。これら6つの活動を通して、学生たちは地域から多くのことを学んでいる。どの活動においても、地域の特性をしっかりとみつめる必要性、そのためにリサーチ、分析する力、伝える力を身に付ける必要性を感じるとともに責任をもって担当する大変さを実感している。また、地域の多様な組織や団体と関わることで、人とのつながり、人と地域とのつながりの大切

さを知るとともにその中で学生としての役割を考える機会にもなっている。仕事の一部を分担するだけでも多くの課題があり、連携するメリットとデメリットもあるが、学生は一時的な関わりであっても地域に対する関心が深まり、地域社会と関わる大切さを学ぶ貴重な機会であると考えている。

地域社会にとって、様々な取り組みへの学生参加のメリットはなんだろうか。学生が関わることで若い世代が地域へ関心をもち、活動以外でも地域を利用するようになれば、メリットであろう。イベントや提案をする中で学生の役割を考えると、利害関係に縛られず、自由な発想やリサーチした上での提案ができることは地域にとって新しいことなのかもしれない。ただ、本学科の学生は4年間のうち、研究室に所属するのは2年間であり、実質、活動に中心的に関わるのは1年である。地域社会との連携活動は継続的に行う必要があるが、学生個人として、継続的に関わることは難しい状況である。研究室として活動を継続させることを重要視しているが、年によって学生数も異なり、工夫が必要である。

本稿で紹介した世田谷区での取り組みは、研究室単位での活動であるが、一研究室での活動では限界もあり、複数の研究室や研究室以外の有志学生を募って、活動の幅を広げている。学内での連携も始まっている。2013年4月に学内に現代ビジネス研究所が設置された。現代ビジネス研究所は、公募で選ばれた企業・行政機関・NPO等で豊富な実務経験を持つ社会人が研究員として所属する研究機関である。ここでは研究員の専門領域を基に大学・企業・地域が連携し、多様な協働環境を創出していくと共に、プロジェクト研究に取り組む学生の教育・支援を進めている。また、研究所のひとつのセクションである「昭和デザインオフィス」では学内と学外の諸団体がコラボするプロジェクト活動として、デザインや商品開発の企画・立案などを行っている。筆者も現代ビジネス研究所のメンバーとして、「昭和デザインオフィス」で活動を行っている。また、世田谷区内の大学、日本大学、成城大学、国士舘大学、駒澤大学、昭和女子大学のまちなかの活性化に携わる5研究室で、2012年春に「世田谷まちなか研究会」を発足し、大学を越え、研究室間の連携も図っている。それぞれの研究室における世田谷での取り組みを知ることで互いに抱える問題や利点を学びあう良い機会となっている。

事例①で紹介したイベント「したのやえんにち」で屋台を10基制作し、ポスターやパンフレットを作成したが、これらの費用の一部は文部科学省の支援プログラム「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）せたがやの環境共生の人づくり・街づくり-地域とつくる継続的な次世代リーダー育成プログラム」（平成18-20年度）によるものである。良い企画があっても資金がないと実現できない場合もある。2013年4月からは「昭和デザインオフィス」のプロジェクトとして認められたものに関しては、費用の一部を賄うことができるようになった。本研究室のような活動では、大きな資金は必要ないものの、文部科学省の支援プログラムや研究所のプロジェクトとして認められることで、地域へのアピールや学内での連携がとりやすくなるため、活動す

る際の拠点として重要であると考え。また、イベントのような一時的な活性化の取り組みだけでなく、日常の中に活かせる取り組みを地域社会とともに考えていくことが今後の課題である。

参考文献

「ふるさと世田谷を語る 池尻・三宿・太子堂・若林・三軒茶屋」

(世田谷区、平成6年3月発行)